印刷　アオヤギ株式会社　福岡市中央区渡辺通二丁目9-31

# 福岡大学 医学会ニュース No.64

福岡大学医学会　福岡大学医学部内

## 医学部長就任のご挨拶

福岡大学医学部長
久保　真一

昨年十二月一日付をもちまして、黒木政秀前医学部長の後任として医学部長に就任いたしました。何卒宜しくお願い申し上げます。

**カリキュラム改革について**

さて、大学医学部の第一の課題は、言うまでもなく教育にあります。本学の医師国家試験の合格率の低迷は、最重要課題です。本学の医学科の教育は、多くのきめ細やかな対応・対策がなされていますが、結果として効果があがっておりません。これまでも、カリキュラムの改革作業が進められていますが、現在、抜本的改革を目指し、廣松教務委員、出石教育計画部教授とともに、プロジェクトチームを設置して、毎週一回のペースで検討会を実施し、平成二十五年度からの新カリキュラム導入を目指しております。その改革は、①一年生の医学教育の充実、②基礎医学教育における研究室配属の導入、③臨床実習の充実、特に診療参加型臨床実習の導入とそれにともなう実習期間の延長の三つを柱としています。これらの改革を通して、試験対策に追われるのではなく、医学そのものを学ぶことの重要性を知り、医学に対する興味を喚起することができるものと考えております。カリキュラム改革の成果を上げるためには、学生の修学上の問題も考えなければなりません。潜在する修学上の問題を抱える学生が教員と相談できる体制を充実させる一助として、従来の担任制に加えて、学生・教員が参加する県人会に多くの教員が参加するように、呼びかけているところです。さらに、勉学、課外活動等に頑張っている学生を表彰する「医学部長表彰」の制度を設置しました。平成二十三年度の表彰を来る入学式において行うことにしています。

**入学試験の見直し**

入学者の選抜においては、面接の集団面接が実現し、本学のアドミッションポリシーを満たす人物評価を重視した選抜となりました。一方で、地域枠特別選抜の導入による全国的な定員増加が学生の学力低下につながることが懸念されています。本学においても、学力低下が問題となりつつあります、入学者の学力水準を維持するために、現在、東京、大阪、福岡で実施している入学試験の地域の拡大、新たな選抜方法の導入等を目指し、検討を重ねています。

**研究支援、研究科について**

研究の推進には、拠点化と支援体制の充実が重要と考えます。拠点化として既に各研究センターが設置されており、これらのセンターからは多くの業績が出ています。今後は新たな拠点化領域を発掘し、センター化を目指します。一方、支援体制については、総研を中心として、私学助成等の大型予算をもとに、機器等の充実を目指すとともに、リース制度の導入を模索する等し、同じ予算で、より多くの研究分野を支援できるように考えていきます。これらの課題については、白澤医学研究科長、鍋島研究推進部委員の両先生と協力して取り組んで参ります。

最後に、これから様々な改革、課題に取り組んで参ります。福岡医学会の皆さまには、ご協力、ご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

## 「時代が求める福岡大学病院に向けて」

福岡大学病院長
山下　裕一

昨年十二月に福岡大学病院長を拝命し、福岡大学病院の解決すべき多くの問題を知り、その責任の重さに身の引き締まる思いです。福岡大学病院は昭和四十八年八月四日に開院して以来、今年で三十九年を迎えます。病院本館は天井裏の配管の腐食が進行し、病棟への漏水が起こっています。病院本館は経た年数と共に老朽化し、七年前の西方沖地震でさらに老朽化が進んでいます。危機管理の観点からも病院本館建て替えは、避けて通れないものです。この建て替えを阻む要因として、巨額の累積赤字と年度毎の赤字額の増加による財源不足があります。病院全体で丁寧に議論し、解決する必要があります。一方で、新診療棟の明るい話題があります。開院一年が経過し、病院職員の活力と喜びの源となっています。この新診療棟開院は職員の志気向上に大きな効果をもたらし、将来の病院本館建て替えの必要性を加速させました。

日本の医療は、医療費抑制と医療高度化のはざまにあり、相反する命題の中で生き残りをかけた厳しい競争にさらされています。今、福岡大学病院は生き残りをかけた大きな変革の局面を迎えています。しかし、苦しく大変な事ばかりではありません。変革を成し遂げれば、収支は健全化し状況は好転します。その結果、病院本館建て替えが可能となり、最新の医療機器を導入でき、診療部・看護部・医療技術職部・事務部などの各部門の増員が可能となります。職員の皆様と共にそれを目指して進んで行きたいと思います。

福岡大学病院の基本理念は、「あたたかい医療」です。常にこの理念を掲げて、〝九州一〟の臨床力、看護力、医療技術職力、医療事務力、栄養部門力のある病院になることを目指します。医療は、患者と病院職員という〝人々のふれあい〟の中で治療が行われます。治療効果は、病院職員の〝人間力〟にかかっています。職員は、専門職としての腕を磨くと共に知識・技術・技能・感性を身に着けることが大切です。国の医療政策の重点項目は、小児・周産期医療、がん医療、救急医療の三分野です。これらの分野は、過重労働による小児科医、産科医、救急医の減少に対する対策そして国のがん撲滅の施策の対象となります。これらの三分野の充実は、福岡大学病院の性格から見て、まさに力点を置く分野と合致します。内藤病院長時代の「選択と集中」の理念を受け継ぎ、病院改革の拠点分野として将来の福岡大学病院の発展を図りたいと思います。皆様には、重ねてご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

## ―学生と教員　共に在る看護学科―

福岡大学医学部看護学科主任
嶋松　陽子

多くの看護系大学が存在する中、本学看護学科は「キラリと光る看護に結びつくような教育環境作り」、「ヒューマンケアリングの精神を持って看護実践ができる専門職の育成」に力を注いでまいりました。その成果として平成二十三年三月には、優秀な卒業生を初めて送り出すことができました。

学生の学修活動・教員の教育研究活動の双方を振り返ってみましても活気あるものです。学生は、実習病院だけではなく地域施設での看護研究実践をとおして知見を深め学びの場を広げました。また、課外でも福岡大学チャレンジプロジェクトで「つなごう命のリレー」「あなたのそばに私がいる―独りぼっち高齢者ゼロ作戦―」という地域に目を向けた活動、「ポニョ音楽隊」の病院などでの活動を行い、これらをサークル活動として定着させ看護学科を一層活気づけました。ここまでに至るには教員の支援もさることながら、学生達のエネルギーの強さによるものと思っています。一方、教員の研究活動も盛んになり、国内外での研究発表も随分増えてまいりましたし、これらの研究成果が教育に活かされるようにもなってきました。このような研究活動の充実は教育の基盤をより確固たるものにすると思っています。

また、教育カリキュラムも、指定規則の改正を受けて社会のニーズに合うようなカリキュラム編成に改めてきました。看護学科は『看護学』を教育するという、極めて専門性の高い看護専門職者を育成する学科であり、医療技術の進歩、少子高齢化社会、さらには、医療を求める人々のニーズの多様化・複雑化により変化する医療を取り巻く現状に対応できる能力の育成が必要であり、これらに対応できるカリキュラムとなっています。科学に裏打ちされた『考える知』、『実践する知』、『感性の知』を統合した能力を培えるような内容です。さらに、平成二十三年四月から始まった修士課程看護学専攻の教育は、教員個々の教育・研究能力の開発にも繋がると共に、学科教育と修士課程教育の連動性の観点から修士課程のカリキュラムを見直すことにも繋がりました。また、看護のグローバル化による地域・国際化が叫ばれている現状を踏まえて、韓国のみならず米国の大学とも交流を開始しようと具体化している最中です。

しかしながら、現在、福岡県内には十一校の看護大学があり、競争が激化しているのも事実です。この中で抜きんでていくには、学生や第三者による評価をよりよいものに導く必要があり、将来を見据えて看護学科の理念・目標・特徴が活かせる教育全体の資質を高めていく必要があります。また、将来は看護学博士課程の開設を目指し、看護学部・看護学研究科として未来が開けるよう教職員および学生共に努力を惜しまず頑張っていきたいと思います。

# 新風

平成23年10月1日付けで本学へ赴任、昇格された方に自己紹介をしていただきました。

## 神経内科学教授　坪井　義夫

この度、前任の山田達夫先生からバトンタッチで神経内科学教室の舵取りの重責を任されました。よろしくお願いいたします。

私は昭和六十一年に千葉大学医学部を卒業し、当時平山惠造先生の主宰する神経内科に入局しました。神経症候学や平山病の概念を確立するなどの神経学の歴史的業績を残した教授の下で鍛えられましたが、緻密な症候学において私は劣等生で、回診では毎回撃沈していました。その後成田赤十字病院、千葉労災病院、松戸市立病院などの総合病院における神経内科診療を経験しました。この間には幅広く神経救急から慢性疾患のフォローを経験し、そこで培われた経験は私の宝物で、その時に貯めた臨床的疑問はいまだに診療、研究にも生かされています。

神経内科医は、神経疾患を幅広く扱います。神経疾患とは脳、脊髄、末梢神経および筋肉疾患を守備範囲として、疾患としては脳卒中、アルツハイマー病などの認知症性疾患、パーキンソン病などの運動障害疾患、重症筋無力症、多発性硬化症などの神経免疫疾患等を専門とし、症状では頭痛、しびれ、めまい、運動・歩行異常、認知症を扱います。一般内科外来の20%弱、内科救急の15%は神経疾患で、世界の流れでも、神経内科医がこれら疾患のプライマリーケアの役割を担うことが潮流となっています。

これからの目標はこの役割を担う、若い神経内科医を多く育てることです。我々の教室で研修を行えば、幅広い経験や知識が身に付き、臨床力がえられる研修プログラムを作ります。病歴聴取力と、神経診察力から誰よりも正確で迅速な診断能力を高めることを目的とします。既成の神経内科の殻を破り、今できることは何かを常に考え、患者主体の診療を目指します。どこに出ても恥ずかしくない神経内科医に成長し、その先に専門性を見出せば、教室も全面的にバックアップをしたいと思います。みんなの一つ一つの夢が教室の夢につながることができれば、お互いに大きな力になるはずです。

私どもの教室は、一昨年にパーキンソン病の遺伝学で、常染色体優性遺伝の三つ目となる新規遺伝子を報告し大変注目を受けましたが、それもひとりの患者さんからスタートした研究でした。今後も臨床現場からヒントを得て、福岡大学からオリジナルの研究を発信することが夢です。誠実で傲慢でなく、常に学ぶ姿勢をもてば、だれよりも先に自分のめざす領域のリーダーになれると信じて、今の教室員が進んでくれることを期待しています。

……

## 放射線医学准教授　高野　浩一

吉満研吾教授のご推挙により、平成二十三年十月より放射線医学准教授を拝命いたしました。

出身は熊本市で、昭和六十年に真和高校を卒業、福岡大学医学部に入学しました。高校時代は美術部にいましたが映画ばかり観ており、大学では写真部に在籍していました。これらの視覚文化への関心がどこか現在の仕事に繋がっているように感じています。平成三年に大学を卒業して、福岡大学放射線科（小野傭教授）に入局しました。平成五年より聖マリア病院に二年間勤務して特に急性期脳卒中の診療に係わり、平成七年より福岡大学筑紫病院に六年間勤務し、特にMRI診断について研鑽を積んで参りました。平成九年に岡崎正敏教授ならびに宇都宮英綱助教授（現　国際医療福祉大学教授）のご指導のもと、MRIを用いた下垂体体積計測の研究で学位をいただきました。平成十二年に現在の福岡大学放射線医学教室に帰学し、主に神経放射線診断を中心に勉強して参りました。

神経放射線診断の専門家というのはそれほど多くはないのですが、この分野は年を重ねるごとに意外と幅広く、また奥深いと痛感しております。私自身は神経放射線を聖マリア病院でスタートしたこともあって、これまで脳血管障害や脊椎を中心に勉強してきました。最近は、頚部動脈のMRIによる動脈硬化プラーク診断や、脳動脈硬化症と動脈解離のMRI診断などを中心とした研究を行っています。

現在の放射線科を取り巻く情勢は厳しく、マンパワーが慢性的に不足している一方で、CTとMRI診断の需要はさらに増大してゆくことが予想されます。微力ではありますが今後も質の高い医療を縁の下から支えるべく努力してゆきたいと考えています。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 脳神経外科学准教授　東　登志夫

私は一九八八年京都大学を卒業後、関連の施設で研修、診療を行って参りました。ご縁があって、二〇〇九年十月から福岡大学で勤務させていただいています。専門は脳卒中の外科で、特に脳神経血管内治療（脳のカテーテル治療）です。福岡大学では、脳神経血管内治療の実践とシステム作りに取り組みました。教室や他科の先生方、病棟や放射線科の看護師さん、大切な患者さんをご紹介いただいた関連施設の先生方の信頼が得られるように、一例一例ていねいに治療を行って参りました。関係各位のご理解とご協力の結果、二〇一一年の四月にシーメンス社のバイプレーン、フラットパネルディテクターを装備した最新式のDSAシステムArtis ZeeBAを設置していただき、より安全に確実に脳のカテーテル治療が行える環境が整いました。二〇一〇年から二〇一一年にかけては、脳動脈瘤治療用ステントEnterpriseを始めとして、新たなコンセプトの治療用デバイスがいくつも認可、使用可能となり、治療の幅もかなり広がりました。

福岡大学での診療も三年目に入り、井上教授が提唱されている「大学型脳卒中センター」について、自分なりに初心に戻って考えてみました。私はその言葉に魅力を感じて、福岡大学で働くことを決めたからです。「大学型脳卒中センター」とは何でしょうか？

現在、出身大学やバックグラウンドの違うスタッフが脳神経外科に集まっています。診療に対する考え方やアプローチも様々で、カンファレンスでは勉強になることも多いです。この様に「多角的な視点から治療の適応や方針を決められること」は「大学型センター」の最初の要件だと思います。二つ目の要件は「治療成績の検証とそのフィードバック」です。「自分たちの治療成績」を公平な立場で検証して、次の治療方針へフィードバックしてゆかなければなりません。医療は目まぐるしく進歩しています。過去の経験や考え方にとらわれることなく、新しい考え方や結果、そしてもたらされる変化を受け入れる姿勢が必要です。そして三つ目の要件は「結果を発信できる」ことだと思います。二つ目、三つ目の要件に大切なことはそれらを科学的な方法論に基づいて行うこと、そのためには日々のデータ収集をきちんとすることです。とても地味な作業です。研究においては、ひらめきやアイディア、実践をドライブする勢いといったものも確かに大切です。けれども周到な計画や十分検討されたデザインなくしては、現在の社会

# 教室紹介　衛生・公衆衛生学

当教室は、旧衛生学教室と旧公衆衛生学教室が統合され、平成二十三年四月に発足しました。旧衛生学教室は、初代教授として江崎廣次先生が就任、二代目の教授として畝博先生が就任されました。平成二十三年三月に畝先生は主任教授を退任され、現在は総合医学研究センター教授に就任されています。旧公衆衛生学教室は、初代教授として重松峻夫先生が就任され、二代目の教授として平成九年四月に守山正樹先生が着任され、平成二十三年四月からは衛生・公衆衛生学教室教授に就任されています。

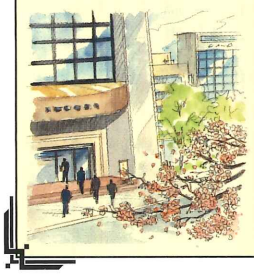
衛生と公衆衛生の区別については従来、個人を対象とするのが衛生学、集団を対象とするのが公衆衛生学であるとする考え方、また、衛生学は応用科学である公衆衛生学の基礎学であるという考え方などがあります。しかし、環境をととのえ、疾病を予防し、健康の保持増進をはかるという目的では、両者は同じともいえます。

学生教育では、平成二十三年度は、医学部一年生の医学概論I、三年生の社会医学I、四年生の社会医学IIを担当しました。医学概論Iでは、人間的な接し方のできる医師になるための、人に働きかける基本技術の習得・実践を担当しています。社会医学I及びIIでは、公衆衛生の考え方、疫学、地域保健、国際保健、社会保障制度、学校保健、人口保健統計、健康教育、環境保健、産業保健、医療保障、精神保健、予防医学、社会保障制度、母子保健、公衆衛生法規・薬害、公衆衛生行政等を担当しています。さらに、三年生では、社会医学実習・学外臨床研修として、講義では得られない地域保健や医療の実態を学ぶための指導も行っています。社会医学は医学と社会とをつなぐ接点の役割をはたす学問であり、学生教育では、医療システムを理解するだけでなく、コミュニケーション能力、医師のあるべき姿、安全性への配慮、信頼される人間関係の構築などの能力の養成にも力をいれています。

広範囲な教育内容と同じように、当教室の研究テーマも多岐にわたっています。最近の主な研究テーマは、①触覚を活用した対話型の生活と健康の調査法、②アレルギー疾患、うつ病、口腔疾患、特定疾患等のリスク要因解明を目的とした疫学研究、③地域住民の基本健康診査結果を用いた要介護状態及び医療費の将来予測に関する実証研究、④農作業事故災害の実態調査とその予防対策についての研究、⑤地域社会の社会関係資本や地域特性などの社会的環境が人間の健康・幸福に及ぼす影響についての研究、⑥肥満関連疾患予防を目的とした前向き研究等です。

人間は社会的な存在で、病気の人も健康な人も、社会の中で生活し、人生を営み、社会から切り離して考えることはできません。自然環境や社会環境が健康にどのように影響を及ぼしているのか、どのように対処したら良いのかのエビデンスの確立に向けて、日々努力しています。

（文責　田中景子）



や世界に認められる仕事は成し遂げられません。

脳血管障害関連では、PEGASUS（京都大学）、CAS-CARE、Hybird（神戸先端医療センター）等、全国規模の多施設共同ランダム化比較試験に参加してゆきます。また先端的な治療デバイスには、医療機器としての有効性や安全性を検証する目的の市販後調査の責任も伴います。このような公的な臨床研究においても信頼されるデータを提供し、日本から発信する科学的エビデンスに協力してゆくことが私達の教室に求められています。福岡大学脳神経外科は歴史のある教室ですが、新たな「大学型脳卒中センター」という大きな波を、将来教室の財産にし、次の世代が世界に発信してゆくための基盤作りを行わなければなりません。三年目の目標と新たな挑戦と考えています。今後ともよろしくお願い致します。

・・・・・・・・・・

**脳神経外科講師　安部　洋**

私は一九七二年に埼玉県大宮市（現さいたま市）に生まれ高校卒業まで埼玉で育ちました。一九九一年に福岡大学に入学し、漠然と心臓か脳が診られる医師になりたいと思いながら学生生活を過ごし、あつい諸先輩方の勧誘をまともに信じて一九九七年福岡大学脳神経外科に入局しました。当初は朝長正道初代教授に医師としての基本姿勢をたたきこまれ、その後福島武雄教授の指導のもと大学と関連病院で臨床修練をしていました。二〇〇三年には九州医療センターの井上亨先生（二〇〇八年より当科教授）のもとで勉強させていただく機会を得て、手術に対する考え方が大きく変わりました。その影響もあり二〇〇四年に米国フロリダ大学に留学する機会を与えていただき、微小脳神経外科解剖の第一人者であるロートン教授のもとで屍体を用いた手術解剖の研究を二年間することができました。帰国後、治療困難な症例に立ち向かえるような外科医になりたいと思いながら関連病院で臨床経験を積んでいました。二〇〇八年井上教授が福岡大学に就任され私も大学に戻る機会を与えていただきました。それからはいままで以上に難しい症例を手術する機会を与えていただき、ここまでなんとかやってきました。現在、私の専門は脳血管障害、頭蓋底病変、良性腫瘍に対する直達手術です。当科では脳血管内治療や内視鏡手術も積極的に取り組んでおり、直達手術と血管内手術、内視鏡手術を組み合わせたhybrid therapyも行っており、また脳卒中内科専門の医師も迎え、いままで以上に多様な治療戦略をたてることが可能となってきています。そして井上教授による大学の垣根を越えた人事交流が盛んに行われており、他大学医師との交流も増え広い視野で脳神経外科を学ぶことができています。今後も患者さんにとってよりよい医療が提供できるような医師になるため精進していきたいと思います。そして、今の若い世代が萎縮せずに積極的な医療ができるように指導や環境づくりを行っていければと思っています。今後もご指導の程よろしくお願いいたします。

・・・・・・・・・・

**産婦人科講師　城田　京子**

この度、宮本新吾教授の御推挙により、平成二十三年十月から福岡大学産婦人科の講師を拝命しました。

私は、福岡市と糸島郡（現糸島市）で高校時代までを過ごし、長崎大学を一九九六年に卒業後、現在の教室に入局しました。初代白川光一教授には、一年間カルテの「てにをは」からご指導いただきました。瓦林達比古教授には、大学院に進む機会をいただいて、生化学教室（黒木政秀教授）でのご指導のもと、卵巣における初期卵胞発育に関わる分子の基礎的研究で学位を取得いたしました。

現在、臨床では婦人科内分泌疾患すなわち思春期・更年期のホルモン療法や、生殖医療に携わっています。生殖医療では、病気を治療することで新しい生命が宿り、患者さんに「おめでとう」と言えることが、何にも代え難い喜びです。しかし残念ながら、なかなか治療効果の得られない難治症例もあります。こういった症例の中には、長年、子宮内膜症*に起因する月経痛に苦しんだ末に子宮・卵管・卵巣が病変に侵されて、解剖学的に自然妊娠が望めなくなっている症例も少なくありません。このため、研究では子宮内膜症をテーマにしています。既存の子宮内膜症の薬物治療は全て、女性ホルモン（エストロゲン）を抑制することで治療効果を得るために不妊治療と平行できないという問題を克服すべく、ホルモンに依存しない新たな子宮内膜症の治療薬の開発を目的に基礎的実験を進めております。

医師になって十六年のうち十年を大学に在籍したおかげで、漢方を指導してくださる先生方、性同一性障害の診療で連携してくださる精神科・泌尿器科・形成外科の先生方、研究を手伝ってくださる方々との出会いがあり、その他多くの病院スタッフにも日々支えられています。一番身近な医局では、ここ数年日本産婦人科学会の新規会員の四十％が女性となっている中、私の入局当時では考えられないほど女性の割合が増えました。いつの間にか女子（?）の中で最年長者となってしまいましたので、各人が抱える女性特有の事情に配慮しながらも、医師としての責任を果たし、向上していける環境を整えるよう微力を尽くしていきたいと考えています。

今後も福岡大学医学部、そして病院に貢献できますよう努めて参りますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

*子宮内膜症：子宮内膜やそれに似た組織が、本来あるべき子宮の内側以外の部位に発生して増殖するため、病状が進むと激しい月経痛や不妊の原因となる疾患。

## 教室紹介　脳神経外科学

### 太く・短く・かっこ良く

井上　亨教授以下七名のスタッフ、レジデント四名で構成。決して大所帯とはいえない医局ではありますが【医師は日々の努力を怠ることなく、まじめで勤勉であれ】を信念にチーム一丸となり、地域社会への貢献を目指しております。日々の診療では笑顔を絶やさず、元気はつらつ、爽やかに患者さんに接しています。

**特色**

脳腫瘍、脊椎脊髄疾患はもちろんですが、地域のニーズに応えるため大学型脳卒中教育に重点を置き、脳神経外科専門医の資格収得および高度な専門性をもつ脳神経外科専門医育成を目標としています。全国では珍しく、脳神経外科医局内に専任の脳卒中専門内科医スタッフをお迎えし、専門内科医からの視点で脳卒中患者に対する治療方針や手術適応、術後評価などを行っています。若手医師または学生教育の分野では、手羽先を用いた顕微鏡下の血管吻合の体験実習や人体脳血管模型を用いたシュミレーションシステムでの脳血管内治療カテーテル実習、人工モデルを使用しての神経内視鏡の基本的手技のトレーニングにも熱心に取り組んでいます。また女性医師が活躍できる働きやすい職場環境を整え、特徴ある臨床コースも備えています。

**実績**

二〇一一年手術総症例数五八九例（直達手術四三七例、脳血管内治療一五二例）、新患外来紹介患者九三二名

**教育**

初期臨床研修において全身状態の把握、外科としての基礎知識、脳・脊髄の病態生理、初期対応のみでなく、病める患者、家族への対応など全人的医療を学び基本的な医師としての心構えを身につける教育をします。卒後研修終了後の後期臨床研修では、脳神経外科専門医としての知識と技術の習得を目標に臨床教育を行います。緊急性を要する脳血管障害、頭部外傷も当院救命救急センターと協力し、積極的に三次救急患者を受け入れ、プライマリーケアーを研修します。脳卒中ケアユニット（SCU）では日本脳神経外科学会専門医、日本脳血管内治療学会脳血管内治療専門医、日本脳卒中学会専門医、日本医学放射線学会放射線科専門医、日本救急医学会救急科専門医、脳卒中リハビリテーション看護師、SCU専属理学療法・作業療法士が揃ったチーム医療を患者さんに提供できるような体制が整っています。具体的には、一刻を争うt－PA投与による超急性期血栓溶解療法を行う脳梗塞診断では、神経超音波検査が三六五日二十四時間可能です。迅速な治療指針、責任病巣血管の確定が求められる脳卒中救急の現場では重要な役割を担っています。当施設では超急性期血栓溶解療法の適応から除外された症例はマイクロカテーテルを使用する脳血管内治療を積極的に行い、必要に応じて血行再建のためにバイパス術を選択し複合的治療を行うことも可能です。治療困難症例に対しても常時、諦めることなく治療しています。

**臨床研究**の分野では世界初サイボーグ型ロボットHAL（Hybrid Assistive Limb）を配置し早期リハビリテーションを開始しました。治療後は後遺症を最小限にするため急性期から積極的にリハビリテーションを開始しています。

このように最先端医療技術を集約させ一人でも多くの脳卒中患者さんが社会復帰できるように努めています。この充実した医療環境は、医学教育の面でも他大学に自慢できるようになりました。

**関連病院**

福岡市内に福岡赤十字病院、福岡市民病院、福岡東医療センター、白十字病院、福岡山王病院、市外に佐世保中央病院、社会保険小倉記念病院などの大きな中核病院が多く、各病院との連携を元に地域医療機関との密接な関係を構築しています。定期的なカンファレンスを開催し提携病院との症例の情報意見交換をすることで患者さん及びその家族が安心できる地域密着の医療を心がけています。今年春より、離島医療にも貢献できるように沖縄県立宮古病院へスタッフを派遣し、患者さんが快適な医療を受けられる環境作りに積極的に参加する予定です。

近年、労働環境が厳しくてスタッフが疲弊し、治療におけるリスクが高い診療科では若い医師、学生の入局が遠慮がちになっています。当医局では高い志を持ったプロの集団として、太く・短く・かっこ良くをスローガンに井上教授を中心にチーム一丸となり、希望をもって日々努力しています。

（医局長　岩朝光利）

## 祝 福岡大学医学紀要第38巻 優秀論文賞

**有島 宏明（心臓・血管内科学）**
Statins Induce the Gene Expression of Apolipoprotein A5 in HepG2 Cells

**松井 雪子（形成外科）**
Role of $Na^+/Ca^{2+}$ Exchanger Type1(NCX1) in the Angiogenesis Induced by Lipo-$PGE_1$ in Murine Hindlimb Ischemia Model

## 福岡大学医学会第65回例会報告

日時：平成24年3月6日(火) 17:00～18:05
場所：医学部臨床大講堂

【進行】集会幹事 **三宅 吉博**

1）**開会の辞**　集会幹事 **三宅 吉博**
2）**会長挨拶**　医学部長 **久保 真一**
3）**新任教授講演**　**講演25分、質疑応答5分**
講演者…**坪井 義夫（神経内科学教授）**　座長…**久保 真一**
**「神経内科疾患の病態解明から治療へ」**
4）**福岡大学医学紀要38巻優秀論文賞授与式**
受賞者：**有島 宏明（心臓・血管内科学）**
**松井 雪子（形成外科）**
5）**受賞論文の要旨講演**　**講演10分（質疑応答含む）**
講演者…**有島 宏明**　座長…**松永　彰**
「Statins Induce the Gene Expression of Apolipoprotein A5 in HepG2 Cells」
講演者…**松井 雪子**　座長…**大慈弥 裕之**
「Role of $Na^+/Ca^{2+}$ Exchanger Type1(NCX1) in the Angiogenesis Induced by Lipo-$PGE_1$ in Murine Hindlimb Ischemia Model」
6）**閉会の辞**　集会幹事 **三宅 吉博**

講演された先生方を囲んで
（左から朔先生、坪井先生、有島先生、久保医学会会長、松井先生、三宅先生）

## 第38回 医学部慰霊祭

第三十八回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約四百名が参列し、平成二十三年十月十五日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された三十五柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた四十柱、合わせて七十五柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、黒木政秀医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて七十五柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します』と新たな誓いを披瀝されました。

## 長い間 ありがとうございました

（平成23年10月1日～平成24年2月29日までに退職された方）

○増本　幸二 准教授（総合周産期母子医療センター）
○馬場　康彦 講　師（神経内科・健康管理科）

以上、10月31日付

## 学位取得

**次の方は、平成23年9月13日付けで福岡大学より博士（医学）を授与されました。**

### 課程修了による学位取得者

**岡　陽一郎**（病態生化学系）
Connexin43ノックアウトマウスにおけるインスリン様成長因子の肺成熟に与える影響の検討

**次の方は、平成23年9月27日付けで福岡大学より博士（医学）を授与されました。**

### 論文提出による学位取得者

**松末　綾**（法医学助教）
Genetic analysis of the rhabdomyolysis-associated genes in forensic autopsy cases of methamphetamine abusers

**山下　明子**（神経内科・健康管理科助手）
Medications used to treat Parkinson's disease and the risk of gambling

**新居　浩平**（筑紫病院脳神経外科助教）
Incidence of Hemodynamic Depression After Carotid Artery Stenting Using Different Self-expandable Stent Types

**高瀬　久光**（薬剤部医療技術職員）
Advantage of early induction of opioid to control pain induced by irradiation in head and neck cancer patients

**南部　雅美**（筑紫病院病理部副技師長）
A Multivariate Statistical Study to Obtain Effective Criteria to Detect Well-Differentiated Adenocarcinoma in Endometrial Cytology

## 「第14回 福岡大学医学会賞」論文募集

1．**賞の目的**
福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動を促進することを目的とする。
2．**対　象**
対象とする論文は、福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動にて作成され、**平成23年1月から平成23年12月に発表されたもの**とする。
論文の筆頭著者は本学会会員で、論文発表時に年齢が**40歳未満**の者とする。
但し、福岡大学医学紀要に掲載されたものは除く。
3．**応募方法**
医学部各教室、病院および筑紫病院各部門からの推薦論文を2編以内(1人1編)を目安としてとりまとめ提出する。(別刷各3部を添付)
4．**応募締切　平成24年6月4日(月)**
5．**提 出 先**
福岡大学医学会担当 大山
(福岡大学医学部内　TEL 801-1011 内線3023)
6．**選考方法**
1）応募された論文別刷を医学会評議員に回覧して、7～8月に開催予定の評議員会において3編以内を選出する。
2）選出された論文の著者は、9～10月に開催される福岡大学医学会例会の席で各15分間の講演を行う。
3）各講演を聴取した後に、評議員および聴衆が投票を行う。但し、評議員の1票は聴衆の5票に該当する。
4）投票の結果により、金賞1名以内銀賞2名以内を決定し、医学部長が受賞者の表彰を行う。
5）審査の結果は、福岡大学医学会ニュースにて公示する。
7．**副　賞**
金賞は10万円、銀賞は5万円とする。